

第11回 良寛と信濃川 ～自然を愛し民衆を愛した良寛和尚～

日 時：平成18年9月14日（火）13:30～15:30
会 場：燕総合文化センター 中ホール（燕市）
ゲスト：井上慶隆 氏（元新潟大学教育学部教授）
ホスト：豊口 協 氏（長岡造形大学理事長）

<司会>

皆様、大変お待たせ致しました。只今より、「われら信濃川を愛する『信濃川自由大学』」を開校致します。本日はお忙しい中、ご来場いただきまして、誠にありがとうございます。私、本日の司会進行を務めさせていただきますラヂオハートの風間と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

「信濃川自由大学」は、信濃川の自然や歴史など、その魅力を広く地域の方々に知っていただくために開校し、毎回信濃川にゆかりのあるゲストの方々から、さまざまなお話をお聞きしております。来月には、本年度最後となりますが、新潟市での開催が予定されておりますので、ぜひご参加いただきたいと思っております。

なお、過去の講座に関しましては、「信濃川自由大学」のWebページで議事録を公開しております。お手元の資料にアドレスが記載しておりますので、そちらからご覧ください。

それでは初めに、主催者を代表いたしまして、信濃川河川事務所所長・宮川勇二よりご挨拶申し上げます。

<西沢>

ご紹介いただきました、信濃川河川事務所・宮川所長は今日は都合があり、副所長の西沢でございます。よろしくお願いいたします。

本日は「信濃川自由大学」にご参加いただきまして、大変ありがとうございます。今ほどもご紹介ありましたとおり、この「信濃川自由大学」は、信濃川の自然・歴史そういったものを地域の皆さんにより一層知っていただくことを目的としまして、昨年十月に開校いたしました。今回で11回目になります。これまでに、およそ700名の方から受講をいただいております。私たちと一緒に、信濃川の魅力というものについて、今日ご参加いただきました皆さんと共に学んで参りたいというふうに考えておりますので、今後とも「信濃川自由大学」につきまして、ご支援をよろしくお願いいたします。簡単ですが、開校にあたりまして、挨拶とさせていただきます。

<司会>

ありがとうございました。それでは、第11回講座に移らせていただきます。今回の講座のテーマは、「良寛と信濃川～自然を愛し民衆を愛した良寛和尚～」です。本日はゲストスピーカーに、元新潟大学教育学部教授の井上慶隆先生をお迎えしております。ホストは、豊口協 長岡造形大学理事長が務めます。まず、お二人のプロフィールをご紹介させていただきます。

はじめに、井上慶隆先生のプロフィールをご紹介させていただきます。井上先生は、昭和5年旧巻町現在の新潟市のご出身です。新潟県立高校の教諭として十日町高校定時制仙田分校、長岡高校定時制越路分校、興農館高校、西川竹園高校定時制に勤務されていらっしゃいました。この間、新潟県庁に入って、新潟県史編さん室長補佐となり、その後新潟大学教育学部教授を務められました。著書には、「良寛」、「広川晴軒伝」、共著に「鈴木牧之全集」などがございます。また、新潟県史をはじめ

自治体史で部分執筆をされています。

つづいて、豊口協先生のプロフィールをご紹介します。豊口先生は、昭和8年東京都のご出身です。昭和38年豊口デザイン研究所に入所され、昭和52年に社長に就任なさいました。この間、昭和43年東京造形大学助教授、教授、技術センター所長を経て、昭和59年から平成4年まで、東京造形大学学長を務められ、その後平成6年に長岡造形大学学長に就任、現在は理事長を務められています。この他にも、Gマーク審議委員会会長、信濃川では大河津可動堰改築検討委員会委員などを歴任されています。著書には、「IDの世界」、「Gデザイン・マークのすべて」などがございます。作品には、昭和45年の大阪万国博覧会の電気通信館、昭和60年のつくば国際科学技術博覧会の東芝館などを手がけられました。そして、皆様ご存知の長岡花火ネクタイのデザインから世界のデザインへと、幅広く活躍中でありたいと思います。以上、井上慶隆先生と豊口協先生のプロフィールをご紹介します。それでは、井上先生、豊口先生をお迎えいたします。皆様大きな拍手でお迎えください。

それでは、ここからの進行は豊口先生にお願いいたします。どうぞよろしくをお願いいたします。

<豊口>

早速、お話に入りたいと思います。今日は自由大学ですから、気楽にさせていただきたいと思います。これから2時間みんなと一緒に良寛さんの姿を頭に思い浮かべながら、井上先生のお話を伺いたいと思います。私、ホスト役を務めさせていただきますけれども、実は専門家ではございません。13年前に長岡にやってみまして、信濃川のあまりにもすばらしく、美しさに感動いたしまして、それから信濃川を心の支えとして毎日生活をしているわけです。良寛さんもやはり一生を通じて信濃川と共に生きてこられた方であるという事を伺いまして、身近に感じております。と申しますのは、私が生まれて十数年前まで、良寛さんという方は子供と手まりをついているというイメージと、托鉢に回って毎日の食べ物をいろんな方からいただいていた。それからもう一つ、とにかく素人には読めない文字をたくさんお書きになっていたという印象しかないのです。

研究をしていらっしゃる方に伺いますと、良寛さんというのは大変な書家であって、芸術家であって、その書の中に自分自身の感性というものをに入れて一つの絵のような文字をお書きになって、その絵のような動きのある文字の中にご自身の感情が満ちあふれていたのだ。そういう総合的な芸術の道を歩まれた方であると。それからこよなく子供を愛し、自然を愛し、日が昇れば町を歩き、夜になれば庵の中で瞑想にふけられたというお話を伺っているのですが、実は新潟県にまいりまして信濃川を見まして、特に良寛さんが生まれて育った寺泊や出雲崎といった地域を回ってみますと、私が今まで受けていた印象というのはちょっとおかしいのではないかという気がしたのです。実は良寛さんが育っていた頃、活躍をされていた頃というのは、信濃川というのはそんなにのんびりした川じゃなかった。大変な暴れ川であったということが分かってまいりました。ですから、子供と一緒に手まりをついてのんびりと夕日を眺めていたなんていうこと、それだけの余裕がこの環境にはなかったのではないかなという気もするのです。

また書を拝見しますと、時代でいろんな文字の形が現れてきている。それは素人には読みにくい、分かりにくい、しかもその書の中に書き込まれている内容というのは奥深くて単純に表現されている言葉だけで解釈をしていいのかどうかということに対して、疑問を感じさせるようなものがたくさんあるわけです。それからもう一つは、ある人に伺いましたけど、良寛さんは、子供と遊ぶ事も非常に好きだったけど、遊女と遊ぶという事も非常に好きだったそうです。おはじきをしたりして遊女との語り合いの場を作られる事もあったという話も聞きまして、良寛さんというのはやっぱり普通に理

解しているような方ではなくて、本当に人間的に非常に興味のある方ではないかなという気がしてまいりました。良寛さんが生まれたこの地域、出雲崎の辺でしょうか、18才で出家をされる訳ですが、その生まれて18までの間の生涯というのがわからない。実家は豪商であって、お金持ちであって、この地域では大変な力を持っていたお家だそうです。しかもその長男に生まれて、やがてその家を継ぐはずであった人が出家をされた。その辺の解釈・理解も難しくなってくるのです。今日はその辺も含めて良寛さんの最初の生い立ちから始まって、人生の歩みというものも含めて井上先生にお伺いしたいなと思ってやってまいりました。

<井上>

今、豊口先生から自由にとのお話で、こっちも自由に話をしたいと思います。なにせ、相手の良寛さまは我々と比べものにならないくらい自由自在だったわけですから、そのつもりで話をすすめてまいりたいと思います。最初に、良寛さまの生涯をざっとおさらいしておいたほうが便利ですので、まとめてみます。良寛さまが生まれたのは、いろいろ説がありますがけれども、宝暦8年、1758年九代将軍家重の頃です。その頃に、出雲崎の名主であった橘屋に生まれたわけで、この橘屋というのは、非常な名家でして、そうでないという説もあるのですが、新潟県史を編纂する途中で中世史部会の人達によって東北大学図書館に橘屋についての資料があることがわかったのです。どういう資料かといいますと、豊臣秀吉が伏見城をつくり、そしてその伏見城が地震で壊れるのですが、その修復をするときの資料だと思います。秀吉はブランド好きなので、その材料として、当時、出羽の秋田地方を支配していた秋田家に命じて、板、もちろん秋田杉の銘木でしょうね、板を運ばせた。その秋田家から請け負って、橘屋が敦賀まで材木を運んでいる。そういう記録が、東北大学に残っています。そうすると、秀吉のご用材を秋田家と交渉しながら敦賀まで運ぶというのは、これは、ちょっとやそっとの商人ではないだろうということが考えられる。途中で失った、横流ししたなどとなったら、これはもう、秋田家の存亡にかかわるわけですから。橘屋はそれだけの、名家・豪商だったわけですが、江戸時代の中くらいになると、だんだん衰えてきた。しかし、一応名家ですから、誇りはある。気位はあるけれども、衰えてきたというふうなことが感じられるのです。そこに与板の新木家から、以南が婿養子として入る。以南は俳諧の作者としてはうまいし、非常な教養人で、旧家の婿にわざわざ迎えられるくらいですから、しっかりした人物だったのだらうと思いますが、おそらく性格的に繊細すぎたのではないかと。橘屋が隆々と栄えている時だったら、もののわかっただんな様として通ったのでしょうけれども、衰え始めた旧家のあとを引き受けるというには、強引な手腕に欠けている。彼自身、イライラせざるを得ず、町の人達とつまらぬ事で衝突を起こす。そういうふうな状況だったのではないかと。そこに、良寛が生まれるわけです。そして、13歳の時に地蔵堂の大森子陽（オオモリシヨウ）の塾、三峰館に入って6年間ほど学んだらしい。大森子陽というのは、その前に江戸に出まして、荻生徂徠（オギユウソライ）の系統の学問を学んだ。儒学の中でも幕府の御用を務めた朱子学派は、「天は天であり、地は地である。上下の秩序を守ってこそ世が治まる」というふうな堅苦しいところがあったわけですが、荻生徂徠の学問は少し融通がきき、実証的、科学的に世の中を見ていく、そういうところがあったようです。良寛は子陽からその傾向の学問を6年間習って、たぶん世の中に対する目もかなり鋭くなったのではないかと考えられます。当時の私塾というのは、儒学を中心にして勉強するわけですが、寺子屋と違ってその地方のエリートが学ぶのですから、感じからいうと、戦前の旧制高等学校に近いような雰囲気がある。そしてそこで儒学の基礎的な学問を身につけると、ある者は江戸へ出てさらに儒学を深める、ある者は医学を学ぶ、ある者は仏教あるいは神道それぞれの教義に深入りする、そういうちょうど分かれ道のようなのが昔の塾だった。そこに近在の、

割に家柄が良くて、しかも才能にも恵まれているエリートが集まるわけですから、切磋琢磨が行われる。たぶん良寛は、いろいろと、自分はどういう方向にむいているのだろうか、旧制高校、現在で言えば高校から大学の教養課程くらいの雰囲気を持った塾で、俺はどっちにむいているのだろうか、まじめに考え始めたのじゃないか。そして、自分は庄屋・名主として地域をまとめていくなんていうことは苦手だと自覚したと思うのです。じゃあ儒学を究めて儒者になるか、しかしそれもわずらわしいということで、仏教のほうに惹かれていった。そして、18歳の時にたぶん家に帰ったのだらうと思えますけれども、そこでまた父親と町の人達とのいざこざが起きるのを見てうんざりしてしまって、家を出たのではないか。そのまま出雲崎の光照寺という禅寺に入ったという説もありますけれども、ことによると禅寺には入らないで、先生であった大森子陽に相談しながら、得度はしないまま禅の修行に励むというような生活を続けたのではないかというふうには私は考えております。そして、22歳のとき出雲崎の光照寺に入りまして、そこへやって来た備中玉島円通寺の国仙和尚から得度を受け、玉島へ行って、11年ほど修行をする。その後諸国を行脚したと言われてはいますが、やがて戻ってきて、国上の五合庵に落ち着き、その周辺で生活することになったと思います。したがって、私に言わせれば、良寛は儒学を学んだのも地藏堂ですね。玉島で修行するけれども、そのあとずっと五合庵やあるいは国上山のふもとの乙子神社の草庵で修行していた。最後69歳で和島の木村家へ移って、そこで74歳のときに亡くなるわけですが、全体にソロバンをはじめてみると、西蒲原にいたのが人生の大半を占めるわけです。良寛は自由で、いろいろ才能にも優れていたけれども、どんな人間だって環境から隔絶できるはずはないわけですね。否応なしに西蒲原の風土あるいはその人達の影響を受けたらうし、そして、あるいは、ことによったらそれ以上に、そういう土地の人達に影響を与えたかもしれない。そういう点で、良寛は西蒲原と強く結ばれていた。ことによれば、この信濃川自由大学でも良寛についてのこの会が、ここで催されているわけですから、現代に至るまで西蒲原と最も関係の深い人物の一人なのじゃないか。どうも私、巻の出身なものですから、我田引水になりがちで、豊口先生から辛らつなご批判があるかもしれませんが、良寛の一生をざっとたどってみると、そんなふうになります。

<豊口>

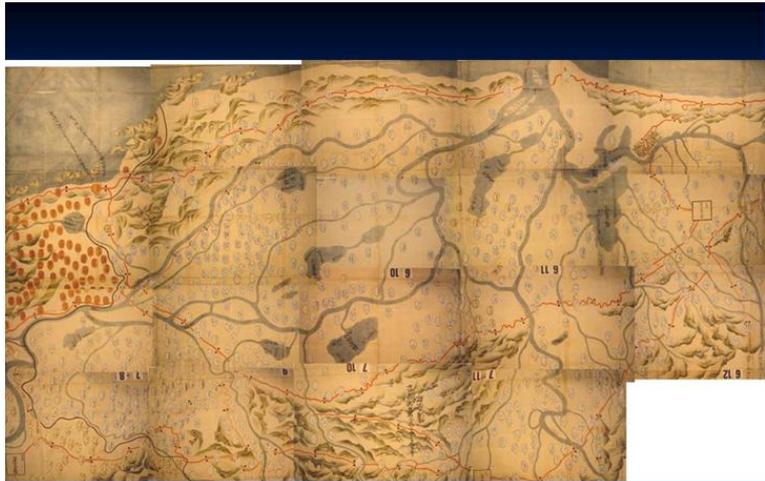
ありがとうございました。現代風に翻訳をしますと、家がいやになった。家出をしたと解釈しているのだらうと思えますね。家を出て自由に生活しよう、自分なりに勉強をしようとして、儒学を習ったり、仏の、僧としての道を歩もうとして来た。しかし、残念な事に自分の実家が橘家という大変な名家で、そことのつながりは切るわけにはいかない。お坊ちゃまとして、人々は迎え入れてくれた。困る事もあるけれども、自分の実家の力というものがこの地方に、歴史的に根をはっていたために、どこへ行っても受け入れてくれた。ということで、少しは甘えの気持もあったのかもしれませんが、働いて食べる苦勞がなくても、周りの人から食べるものはもらう事ができた。その中で自分の友達とのつきあいもあって、この地域社会の中で自分の持てる力を使いながら生活してきたのだというふうな感じがするのです。これは相馬御風さんがお書きになった「一茶と良寛と芭蕉」という本なんです。大正14年に出ています。なぜこんな本を探してきたといいますが、私の母の書棚にこれが入っておりました。母が大学の文学部にいたときにこれを買って、読んだらしいのです。最後に母の昔の名前がサインで入っておりました。春秋寮という寮の名前も書いてありました。これを開けて読んでみますと、相馬御風という人は、ある別の面で、良寛さんを辛らつに批判している所があります。その書いてある内容を読んでいきますと、非常に複雑な人格が紹介されています。その中で、私がはっと気がついたのは、良寛という人は、書道の世界でひとつのコミュニケーションのネットワークを

作って、その人が読めない文字を通して人と人をつなぎとめていったという、かなりの戦略家であったのじゃないかなという気がしたのです。いろんな方が相談に来たら、一緒に一杯飲みながら話をして、「ああそれはこうだよ」と、「じゃあその気持を私はここに書いてあげるから」、「君これを持って帰りなさい。」「ありがとうございます。」もらって読もうと思ったら、読めない。「いや気持としてはこういうことが書いてあって、君を紹介するから、どこそこへ行きなさいよ」「ありがとうございます。」というふうに、ずいぶん紹介状を書いているのです。いろんな人を紹介している。乞食の紹介なんて、辛らつな書き方も御風さんは書いていますけれども、困った人を自分の知っている知人のところへ紹介する。その手紙を書いてやる。もらった方もそれを読もうと思ってもよくわからない。わからないけど、わかったような顔をして「いや～よく来ましたね。」と言って、その書をもって納得をして、来た人間を優遇する。というふうにして、ある地域社会を良寛さんはうまくコントロールしていたのではないかなという気がするのです。なぜこんなことを申し上げるかといいますと、実は堺の豪商といいますか、大商人のところに生まれた千利休という人がいますが、この人は茶道という一つの道を作り上げ、戦国武士たちをコントロールしたのです。操ったのです。武士たちはそういう美の世界がわかりませんから、千利休に言われると「う～ん、なるほど」と思って刀まではずして、茶室の中に入って話を聞く。もう裸状態ですけれども、そこでいろんな話をして、美の世界を問われる。そういうふうにして千利休はさまざまな武将を操りながら、時代を引っばって行って、大変な利益を堺の商人の中へ落とし込んでいく。地域社会のコミュニケーションを茶道というものではかった。一方、良寛さんは書道という世界で、そういうコミュニケーションの世界を作り上げて、当時の社会をコントロールしてきたのではないかという面が見えてきたのです。これは、私としては、暴言だと皆さん思われるかもしれませんが、やっぱりその時代の中心になって、社会を動かしたということは、他の人にはわからない世界、そういう世界をうまく使って、一つの社会システムを作ってきたのではないかなという気がするのです。良寛さんというのは、子供と手まりをついていたということは、これは一種のカモフラージュかもしれません。一方、本来は、遊女とおはじきをして遊んでいた。これについては弟さんから文句を言われているんですね、「やめてくれよ」、と。弟さんも兄貴には手紙を書いているわけです。良寛さんはまた弟に手紙で返事を書いているのですが、それが普通の人には読めない。持っていった人間も読めませんけれども、弟さんにはその気持は伝わる。書を通していろいろコミュニケーションシステムをうまく活用していたなという感じがします。これから井上先生からお話が出てくると思いますが、良寛さんの隠された一面というのは、大変な戦略家であったのではないか。その戦略家の才能が、信濃川の治水工事に結びついて、やがて大河津分水というものを作り上げるきっかけを作り上げていったのではないか。これは要するに、地元で生まれ地元で育って、人々に世話になった。もう一つは、生まれ育った家の、家柄といいますか、血筋を引いて、やっぱりこの地域に自分の力で、ある程度できる事を残していかなきゃいけないだろうという、大変な自覚に燃えていた方じゃないかな、という気がするのです。徳川のお役人を相手にいろいろやっているわけですから、お役人にもばれないような難しい文字を通してコミュニケーションのネットワークを作るということを、お考えになってきたのではという感じがしてまいりました。これから井上先生のお話をさらに聞いてまいりたいと思いますけれども。

<井上>

これはもう、自由も極まれり、というふうなおもしろいお話を伺いましたが、私のほうはどうも自由だ、自由だと言いながら、堅苦しい教員出身なものですから、やっぱり順番で見ていかないと、頭の整理がつかない。さっき、良寛は地域から大きな影響を受けたに違いないということを使ったわけ

うのでは、やっぱり、見学者にとってさびしい。この地図を出せば、ほとんど全ての村が出ているのだから、「ああ、オラがところがある」っていうことで、見る人は安心して、入館料の幾分かは埋め合わせた気分になる。だから、飾ろうじゃないかというようなことで、それを掲げたわけです。その国絵図の信濃川下流の部分を中心に引き伸ばしてもらいました。正保時代、まだ信濃川と阿賀野川が新潟の所で合流していた時代の地図ですけれども、その信濃川は魚沼の方から



正保越後国絵図(新潟市立図書館所蔵)

信濃川自由大学

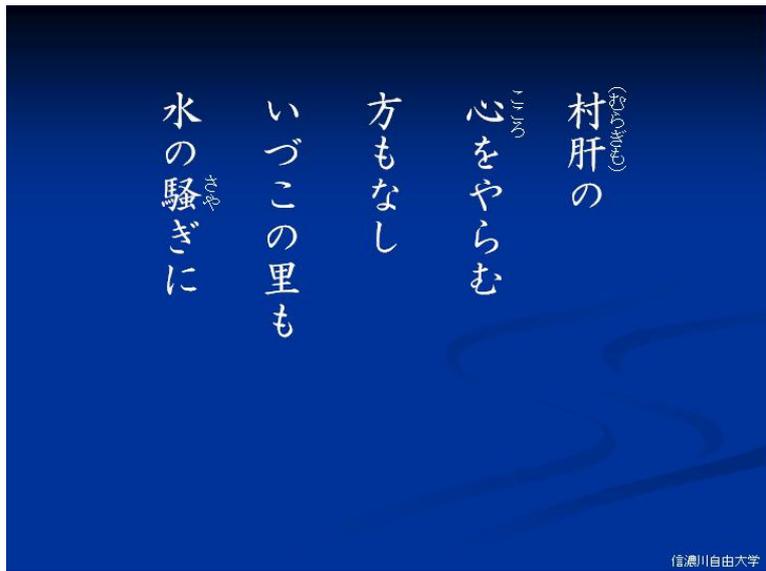
から流れてきて、長岡を通り過ぎて、大河津のところでふた筋に分かれる。画面では、小さくて字が見えませんが、川の名前が書いてある。どう書いてあるかというと、一方は「信濃東川」、と書いてある。そして、もう一方は、「信濃西川」と書いてある。今の西川は西川じゃないのです。信濃西川なのです。そして、地蔵堂と砂子塚の間に川幅が書いてあります。48間、約90メートルです。今、吉田や地蔵堂を流れている西川は、走り幅跳びの選手なら跳べそうですけれども、昔の信濃西川は入り口の所で90メートル近い川幅。吉田あるいは粟生津あたりに行くと、ご覧になればわかると思いますが、向こうの土手とこっちの土手と、土手道がだいぶ離れていますね。やっぱり、7、80メートルから90メートルはあるのでないですか。これが、おそらくもとの信濃川の土手だと思います。そして、その後には大河津分水だとか、あとで話をします三湯水抜きだとか、いろんなことがあってだんだん狭くなったために、現在のかわいらしい西川になってしまった。それで、信濃川の本流信濃東川、それからこっち、信濃西川、黒埼の所でまた一緒になるわけですが、その間を中ノロ川が流れている。またさらにこの間に大通川も見えます。鎧瀧が描かれた北の方は、村がずっとすきすきになっていますね。これは、ここに田瀧とか大瀧という大きな瀧があったからです。たぶん、湯水期にはただの芦原になるのでしょう。そして、梅雨時には瀧になる。地図を作ったときには、水が溜まっていなかったから書かなかったと思うのですけれども、この辺、一面の水郷だったはずなのです。鎧瀧だけは、最後まで残るわけで、はっきり書いてある。その他に、支流島崎川の近くには、円上寺瀧がある。下流のほうには鳥屋野瀧がある。あいだを中ノロ川が流れているわけですが、その東側は白根島なんていわれる。ここにも、いくつか瀧が連なっている。文字通りの水国が越後の西蒲原から中蒲原にかけての地域だったと思います。どれくらいこれが本当に水国だったのかというと、巻の町史にこういう資料がのっています。享保18年といいますから、八代将軍吉宗の頃ですが、佐渡山、吉田町だったのが合併で燕市になりましたね。その佐渡山のお蔵に集めた年貢米を江戸に運ぶために、新潟におろすことになった。それで、船団を組んで川を下った。たぶん、大通川を下ったんだと思います。ところが笠木のあたり、笠木というのは、国道116号で言うと、内野に入る手前、右側のほう2キロくらいですか、笠木という集落があります。笠木まで来たときに、突風が起きて10隻遭難した。船頭が一人、溺れ死んだ。年貢米ですから、失ったら大変だということで、みんな必死になったけれども、とうとう100俵位は、濡れて役に立たず捨ててしまった。そういうことが書いてあるわけ

寛政甲子夏
 凄々芒種後 六月五日を過ぎてから天候が荒れ出して
 玄雲鬱不披 黒い雲がひくくたれて晴れまもなかった。
 疾雷振竟夜 雷が夜とおしとどろいて、
 暴風終日吹 暴風が日がな吹きまぐった。
 洪水襄階除 大水がてて家の上まで浸かり、
 豊注湮田苗 大雨は田畑をうめてさかいめも見えない。
 里無童謡声 村の子らの姿もなく、音もせず、
 終無車馬帰 旅へた馬も車ももどしてこなかった。
 江流何滔々 川水はとうとうと流れ、
 回首失臨沂 岸のさかいはどこにもなく、
 凡民無小大 百姓らは子供も大人も、
 作役日以疲 毎日の仕事で疲れはせている。
 畛界知焉在 田畑はいつたいどこなのか。
 堤塘竟難支 堤防も破れている。
 小婦授杼走 婦女子も機織りどころではなく、
 老農倚鋤歛 農夫たちは鋤を手にしてなげき泣くばかりだ。
 何弊帛不備 村のお宮には供物をささげ、
 何神祇不祈 神という神には祈りつまくしていたはずなのに。
 昊天杳難問 天はそれにたとえてくれぬ。
 造物聊可疑 この世に神があるなど疑いたいほどだ。
 孰能乘四載 だれが、いつたい、
 今此民有依 この農民の多かい歎きを拾めてくれるのだろうか。
 側聽里人話 外へでたついでに里人の話をきくとともにきいてみると、
 今年黍稷滋 ことしの作物の出来がよくて、
 人工倍居常 いつももの倍は働いた。
 寒温得其時 気温もよく、
 深耕今疾耘 ふかく土を耕し、雑草をぬいて、朝夕世話をつづけたのだ。
 晨往夕顧之 それなのに、にわかなの暴風雨は何と、
 一朝払地耗 根こそぎ作物を流出し去った。
 如何之無罹 これを歎かないでおられようか。

信濃川自由大学

です。今、国道 116 号を走ったって、ここで船団が遭難して 10 隻沈んだなんて、到底考えられないけれども、江戸時代中頃くらいまでの、これがこの辺の風景だったのです。ごく一部には昭和 30 年代までちょっとそれに似た風景が残っていましたが、今は全く見られなくなってしまった。だから、今のちっぽけな西川、あるいは広々した蒲原の平野を頭に良寛の生活を思い描いたら、大変な誤解につながると思います。そういう水国なものですから、みんな苦勞する。苦勞の姿は、良寛の詩にもいくつか出てきております。画面は、「寛政甲子（カッシ）夏」という詩。甲子という年号は寛政にないので、どこかに書き間違いがあるだろうといわれている詩ですけれども。長い詩ですから、前の方はいいとしまして、ある年、作物の出来もよくって、みんな良く働いた。気候も良かった。一生懸命に耕したり草取りしたり、朝から晩までみんな稼いだ。良くいったと思ったら、「一朝地を払いてむなし」、大水が出て、すべてむなしになった。「これをいかんとぞ罹いながらん」、もうどうしたらいいのか、わけがわからないくらい、大水で荒れ果ててしまった。こういうのが、良寛が五合庵に落ち着き始めた頃の西蒲原あたりの風景だったと思います。もっともこの詩は、いったい信濃川をうたったのか、西川をうたったのか、あるいは行脚の途中のよその国の洪水を見たのか、それはわかりませんが、何か、信濃川か西川の風景を思い浮かべて十分に理解できる内容だと思うのです。こういう大水の時は非常に困る。じゃあ、水の無い時はどうか。それも逆にまた困るわけですね。こういう歌があります。「村肝の 心をやらむ方もなし いつこの里も 水の騒ぎに」。村肝というのは、心にかかる枕詞。心配をなくするようなそんな手立てがない。どこへ行っても、みんな水の騒ぎ、水争いで大変になっている。良寛も、どうしようもないわけですね。ため息をつくほかは。こんな歌で自らを慰めるほかにはしょうがない。水があればあったで困る。無ければ無いで困る。ありすぎる水というのは、つまり、用水路、排水路が未完成なわけですから、また渇水にそのままつながるわけでは

ね。こういうのが、この辺の状況だった。そして、それをどう解決したらいいのかという問題になるわけですが、この辺は政治的に解決の手段がうまくいかない場所だったのです。どうしてかという、例えば長岡の周辺は長岡藩の領地です。新発田市あたりは主として新発田藩の領地です。村上の周辺は村上藩の領地です。ところがどの城下からも遠い西蒲原あたりは、大名を動かすときの調整の土地といえますか、そういう役割を果たさせられていたわけ



です。例えば、村上来る大名には15万石の大名もいれば、5万石の大名もいる。5万石の大名の後に、15万石の大名がやって来た。10万石分の領地をどこでつけるか。すぐ近く、北蒲原から取ろうとすれば、新発田藩がだまっていない。西蒲原あたり、どこからも文句の出ないこんなところが、ちょうど調整の土地になるわけです。ですから、西蒲原は政治的にもっとも無視され、いじめられた場所。考えてみてください、ここ燕は長く村上藩の所領だったわけですね。地蔵堂のあたりもそうです。ところが、同じ市内でも小池や道金のあたりは高田藩の領地になって、高田の松平が奥州白河へ移ると、松平定信のあの白河藩ですね、白河藩領になって、それがさらに伊勢の桑名へ移ると、桑名藩領になる。それから、吉田なんかは、あそこの今井さんが長岡藩の御用達だったということも有名で、長岡藩領ですね。目と鼻の先がみんなばらばらの領地。その他に幕府の領地が入っていたり、与板藩の領地が入ったり、新潟に近い方にはたしか新発田藩の領地も一部くい込んでいたと思いますけれども、モザイク状に滅茶苦茶になっているわけです。したがって、そんな所にやって来る役人は、それこそ事なかれ主義で、任期の間だけ一揆も起きないでやれば、“ちょうじょうちょうじょう”，というような政治はしない。本気になって水を退治してやろうなんて気持はさらさらないわけですね。ですから、村方は、なかなかうまく協力することができない。川一本むこうは、他の大名の領地。洪水のとき土手のあっちが切れれば、ばんざいですよ。こっちへ水は来ないわけですから。そういう隣同士で、西蒲原はみんな村ごとに仲が悪かったですね。それが、明治以後もずっと引き継いで。今はなくなっただけでしょうか、有名な“西蒲選挙”になるわけです。あの足の引っぱり合いは、歴史的につながりがあるのです。新発田や長岡の周辺だったら、同じ殿様の領地として統一的に支配されるのに、西蒲原はもう滅茶苦茶なんです。そういう点では、非常に不幸だった。だから、さっきも言った「村肝の心をやらむ方もなし いづこの里も 水の騒ぎに」。藩の家老が出てきて、「しずまれ、しずまれ俺が仲裁してやる」ということがないのです。西蒲原では。

<豊口>

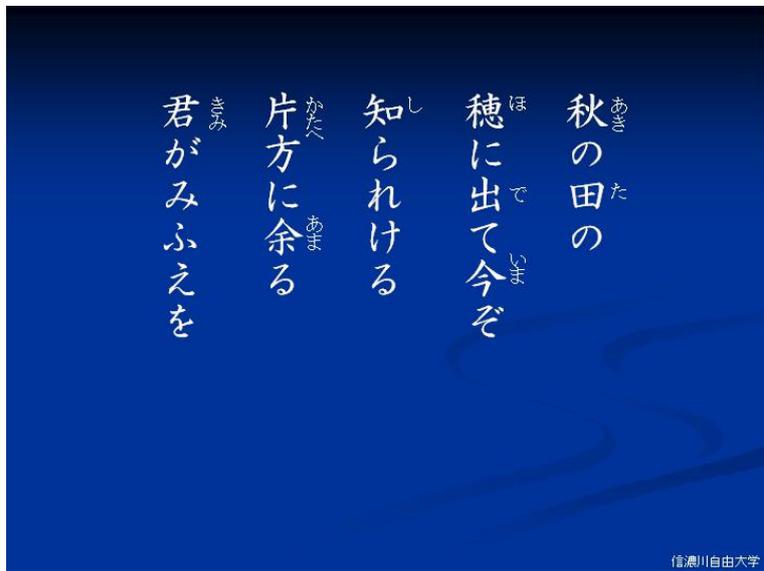
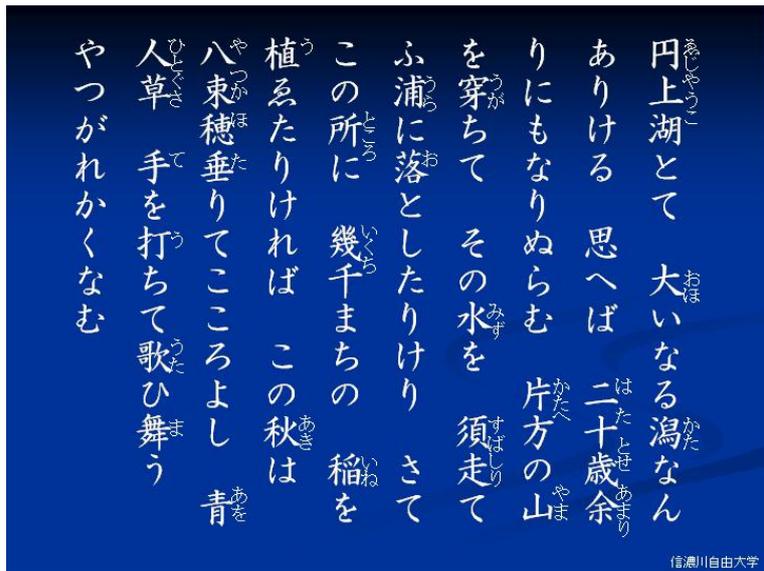
先生それでわかってきました。そこで誰か中心になって、苦労している農民の人たちの心の支えとなって、相談を受ける人がどうしても必要になってきた。良寛さんはそういう人達のレベルまで視点を落として、苦労している農民たちの目の高さでこの地域を見ていた。そういう視点でものを見ながら、そういう人達の相談に乗って、いろんなアドバイスをしておられたのではないかなという気がす

るのです。地域の中に良寛さんに対する尊敬の念が育ってきたし、良寛さんを中心にして、争いごとが起こらないように、とにかく話し合いがうまく済むように。困った人が来たら、この男を泊めてやってくれという案内状を良寛さんはずいぶんたくさん書いておられるそうですけれども。良寛さんの案内状・紹介状が来れば、必ず人を家に泊めて、ちゃんと接遇をしたということがあるようです。今、井上先生のお話を伺っていると、このあたりは行政的には放っておかれた地域だった。それに対してさらに、水禍というものがしょっちゅう襲ってきて、生活そのものが大きく揺れ動いていたという時代が当時の姿だったのではないかな、という気がだんだんしてまいりました。ありがとうございました。

<井上>

さすがに本質的なところを突いておられるように思うのですけれども、そういう具合で、政治的にはまとまりにくい所でした。しかし西蒲原の人間、決してあきらめたわけではない。お殿様が頼りにならないとなれば、自分たちで、といっても、みんなが集まるわけにもいきませんから、庄屋を中心にして集まっていくということになるわけです。その一つの試みが、『正保の越後国絵図』にも出ていた円上寺潟の干拓ですね。円上寺潟は島崎川の水が、現在の寺泊の駅の少し西側といったらいいか、北側といったらいいか、そのあたりに、よどんでできた大きな潟です。島崎川はさらにずっと流れて、吉田の粟生津の近くで西川に合流して、それがさらに、黒埼のところで信濃川に合流して新潟の港から日本海に出る。ということになれば、水位が低いということはおもうわかりますね。いつもこの周辺は水がダブダブして困るわけです。何とかしてこれを取り除きたい。ということで、この辺の庄屋たちがまとまって、須走の砂山をぶち割って、寺泊の野積のところに当時の言葉でマブといっていたトンネルを掘って、水を直接日本海に落とそうという計画を立てたわけです。といって、これだけの工事を自分たちの一存で、藩の許可も得ないでやるわけにはいきませんから、問題は山積です。まず付近の村々がまとまらなかったら、話にならない。俺は反対だ、なんていうのがあったら、だめですね。町村合併と同じことです。それから、この水の出口の、野積のあたりには、塩田、塩浜がありました。そこへ汚れた水が出て行ったら、塩浜は全滅します。ところが野積は松平氏の白河藩領なのです。他の殿様の領地ですから、うかつに手をつけられない。そこで、野積と相談しまして、塩浜がだめになったらその分は我々が保障する。金、または毎年米をやって、保障するという約束を取り付けました。そして、村上の殿様に、自分たちは精一杯やるのだから、お殿様もこの円上寺潟の干拓が成功し、新田が生まれれば、将来年貢が増えるのですから是非協力していただきたい、と働きかけた。殿様内藤信敦は、奥州の松平定信に手紙をやって、百姓がそう言っているからよろしく協力してくれ、と話をつけます。こうしてマブ、つまりトンネルが完成して、この辺にはかなりの新田が生まれるわけです。その新田が生まれるときの中心になったまとめ役は、村上藩の三条役所配下の地藏堂組の大庄屋であった富取家で、真木山の、良寛の学友、原田鵠斎（ハラダジャクサイ）の兄、原田要右衛門が行動隊長といいますが、実際の第一線に立って、牧ヶ花村の解良叔間（ケラシユクモン）、あるいは渡部村の阿部定珍（アベサダヨシ）、こういう庄屋たちがみんな協力して、この事業を成し遂げるわけです。彼らは、大変な苦勞をしているわけです。みんな村々をまとめなければならぬし、集まった人夫の食料をどうするか。素人だけでトンネルを掘れるはずがないわけで、プロを連れてこないだめだ。どこから連れてくるか。その金の支払いをどうするか。そういう大変な苦勞、しかも交渉は村上藩の役人だけでなく、白河藩の役人も相手にしなければならない。もう大変な苦勞をしているはずなのです。阿部定珍や解良叔間が良寛と親しくしているのは、ちょうどその頃なのです。だから、阿部家や解良家に、さきほど豊口先生もおっしゃった、良寛の詩や歌や書簡がいっぱいあります。あれは隠居

のひまにわけのわからんものを見て楽しむかというふうなのじゃなくて、彼らはもっと切実に良寛さまと接していた。もちろん、良寛に「この図面を見てくれ」と言っただけで、わかるはずはないのだけれども、「全く困りましたわ」くらいの相談事は始終していたと思います。良寛はそういう意味で、地元と密着していたと思います。一時、作家の水上勉が『蓑笠の人(さりゅうのひと)』という小説を出して、良寛はみんな苦労しているときに何もしないで働きもしないでちゃんと暮らしていた、あれはけしからんなどと批判した。後で彼はその見方を改めるわけですが、そういう見方は、現在も良寛に対してあちこちにあると思いますが、おそらく解良叔問や阿部定珍たちはもっと切実に、なんと云ったらいいでしょうか、相談役あるいは苦情の捨て所みたいな形で、良寛さまに親しんでいたのじゃないか。やがて円上寺瀉は、完成しました。良寛に画面に掲げた歌があります。ことばがきですが。



「円上湖とて 大いなる瀉なんありける 思へば 二十歳余りにもなりぬらむ 片方の山を穿ちて」トンネルを掘ったということですね、「その水を 須走てふ浦に」須走は寺泊と野積の間のところ、今コロニー白岩の里があるあの辺でしょうね。「落したりけり さてこの所に 幾千まちの」たくさんの広いということですね。「稲を植ゑたりければ この秋は 八束穂垂りて」穂がふさふさと垂れて、「ころよし 青人草 手を打ちて歌ひ舞う やつがれかくなむ」自分もこのように思います。そして気持ちをまとめて「秋の田の 穂にでて今ぞ 知られける かたへに余る 君がみふえを」君というのは殿様、殿様の協力もあって、あれだけの荒地だった、水で困ったこの辺に稲の穂が出ている。ああ良かった、良かった。良寛はこういう点でまさしく住民と共感していたと思います。

<豊口>

私はどうしてもこだわってしまうのですが、良寛さんがそれなりの、土地の豪族たちとうまく協力して、困っている人々を助けながら将来の地域づくりを手がけてきた。良寛さんが食べるものに困ったという話は聞いた事がないのです。そういう知恵を出す事によって、人々から尊敬されかつ支えられてきた。生活をしながら、更に新しい知恵者としての立場を築いていったのだらうという気

がします。大河津分水ができるまでは、この辺の地域というのはしょっちゅう洪水に見舞われていた。実はそれ以前に、その土地に住んでいる人達の努力の結集が新しい土地を生み出し、そして新しい糧を生み出し、そして将来の夢をうまく育ててきていたという事が良く分かりました。これが一つのきっかけになったと思うのですけれども、やがて将来日本の政府を動かして、本格的な信濃川の治水工事というものが動き始める。そのきっかけを作ったのが、実は良寛さんであった、ということがここで立証されたという感じがしております。いかがでしょうか。

<井上>

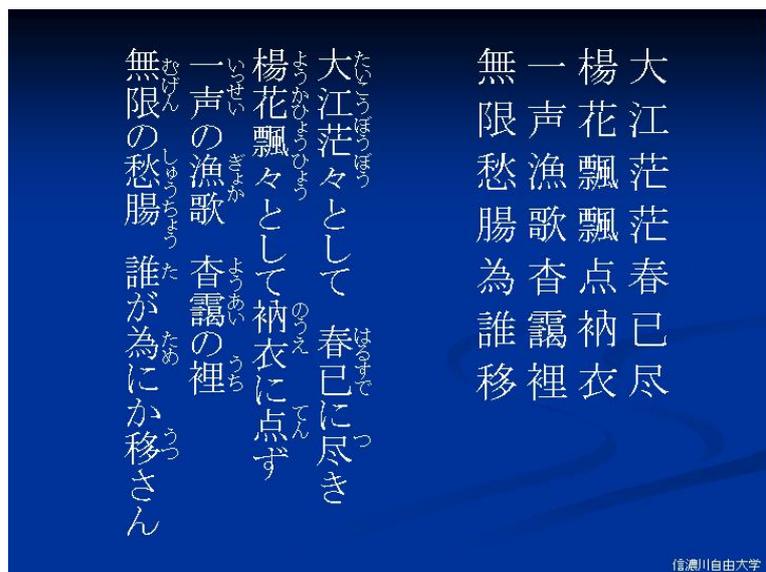
立証と言われると。私は歴史をやっているものですから、臆病でして、なかなかそこまでは断言できませんけれども。感じとしては、その方向。というよりもさっきの寛政甲子の夏の詩ですと、もうどうしようもない。村肝の心の歌でも、どうしようもない、といわれる時代がずっと続いてきたわけです。ところがやれば出来るという時代が開き始めた。良寛は、その接点の時代に生きていた。偶然そうだったのか。多少でも能動的に良寛がそれについて百姓たちを、名主たちを励ますような何かがあったか。その辺はなかなか計量的にどうこう言えないと思いますけれども、良寛は良寛なりに、いい時代、絶望だけの時代ではない、少し上向いた、そういうところに位置していた。という点では、今から見て、彼は彼なりに幸せだったのかなという気がしないでもないですね。

<豊口>

その時代というのは、国上山の時代…

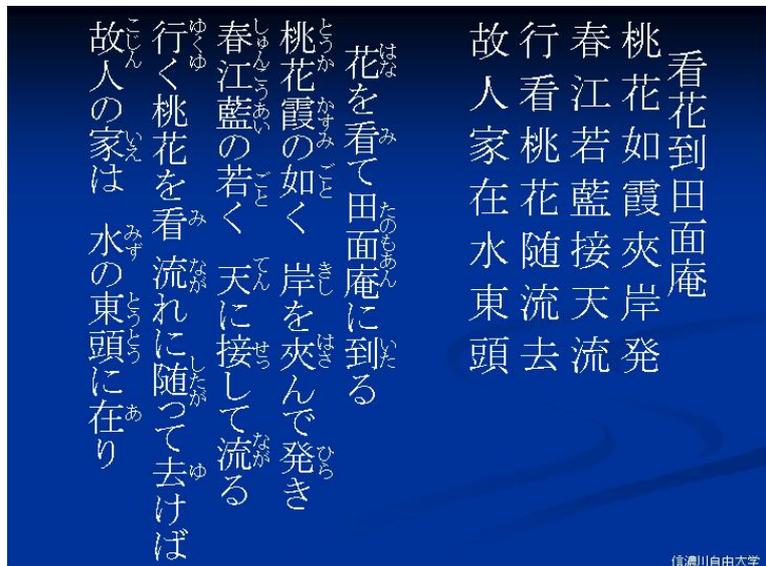
<井上>

そうです。そして、それに続いてもっと大きな事業。西蒲の中央部に鎧瀉、田瀉、大瀉と三つの瀉が連なって、さっきこの辺で船団が遭難したと言ったのですが、円上寺瀉よりもっと大きな工事をして、この水を、西川の底を樋で抜いて、日本海へ直接放流するということが行われた。今は、新川として残っています。新潟大学のちょっと西側、内野駅のちょっと手前のところの新川です。あの三瀉の水抜きを、今度は西蒲原の下流の百姓たちや庄屋たちが大変な犠牲を払って成し遂げるわけです。ここは村上藩領と長岡藩領が多かったのですが、それらの庄屋たちが中心になって、成し遂げていく。そういう点で、さらに時代は進むわけですし、一部にはすでにのちの大河津分水、大河津のところから寺泊のところまでの現在の大河津分水と同じコースを開削する計画が、計画だけでしたけれども、江戸時代にすでに民間から始まっているという記録もあります。、そういう前向きさでは、我々の先祖は単にあきらめと忍従の生活を続けていただけではない。政治的には非常に不幸な状況の中に置かれたわけなのですが、それなりに努力した。円上寺瀉を干拓し、さらに三瀉の水を日本海へ直接放流した。これは西蒲原の百姓の大変な力だったと思います。現代のわれわれも西蒲選挙をやめて、そろそろみんなまとまれば、日本中がうなるくらい大きい仕事をいくら



でもできると思うのですが、なかなかそうもいかないみたいですね。水害・干害で良寛を悲しませた信濃川ですけれども、また静かなときは、非常になごやかな川でもあるわけですね。良寛に、こういう詩がありますね。「大江茫々として 春すでに尽き 楊花飄々として衲衣に点ず 一声の漁歌 杳靄の裡 無限の愁腸 誰が為にか移さん」。「大江」、西川でしょうか、中ノ口川でしょうか、あるいは信濃の本流でしょうか。洋々として流れている。「楊花」、柳の花はひょうひょうとして。「衲衣」というのは僧侶の衣ですね、自分の衣に付く。「一声の漁歌」、舟歌が聞こえる。「杳靄の裡」、もやの中。春のおわりなのでしょうね。「無限の愁腸 誰が為にか移さん」、春の終りの憂い、春愁なんていいますね。そういう情感を楽しむこともありましたし、あるいは川伝いに人を訪ねる事もありました。「花を看て田面庵に到る、」田面庵というの、今は新潟市になりましたが、白根の新飯田に良寛の先輩格の有願（ウガン）という坊さんがいました。その田面庵を訪ねたときの詩ですね。「桃花霞の如く 岸を夾んで発き 春江藍の若く 天に接して流る 行く桃花を看 流れに随って去けば 故人の家は 水の東頭に在り」、この故人というのは、亡くなった人という意味ではなく、親しい人という意味です。

「桃花霞の如く」、今も新飯田あたり、桃の産地ですね。私の教え子で、あの辺で桃をつくっているの
もいます。桃の花が霞のように岸
をはさんで開き、「東頭」、なるほ
ど、新飯田ですから中ノ口川の東
の岸です。親しい有願のうしが水
の東の方にある。こういうふう
に、唐の時代の人の作った詩みたい
な感じもしますけれども悠々と流れ
に従って、桃の花をめながら先
輩を訪ねるというふうな時があっ
た。そういう点では、信濃川は苦
しい川ではあったけれども、この
流域の水はまた、穏やかなときは
非常に親しみを与えてくれたと思
います。



<豊口>

信濃川の厳しい状況と、良寛さんの関係というのはよくわかってまいりました。もう一つは、信濃川が穏やかに流れていた時代、自然環境との中で、良寛さんがこういう詩をよみながら生活をしたということも、よくわかってまいりました。ですから、信濃川というのは単純に暴れ川であったわけではなくて、神の恵みというものを均等に人々に分かち与えてくれていたということが、良寛さんを通してよくわかります。そういう世界を、これほどきれいな詩で、後世に残してくれた、これもまたすばらしいことだと思のです。良寛さんの生活をしてきた時代というのは、新しい時代をむかえるためのいろんな布石がおこなわれていた、という事が見えてまいりました。私が一番、今、気になっておりますのが、子供と手まりをしている良寛さんの姿であります。さきほど、良寛さんは単に子供と手まりをつくと生活だけではなくて、あらゆる人々とのふれあいを大切にしていたのだらうと思のです。ただ歴史的に、遊女とおはじきをしていたなんて書けませんから、子供と手まりをしていたのだというふうな言葉に置き換えてあるのだらうと思のですが、村の人や役人に対して良寛さんとはどういう生活・ふれあいをしていたのか、もう少しお話いただければという気がするのです

けれども。

<井上>

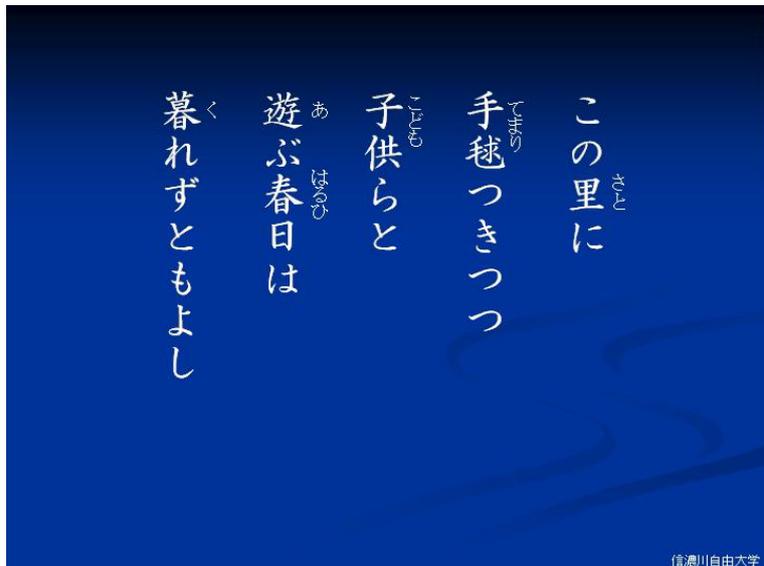
ちょっと、考え始めると難しくなる質問なのですけれども、さっき言いましたように、渡部の庄屋の阿部定珍とか、牧ヶ花村の庄屋の解良叔問、いわゆる良寛の外護者、生活を支えてくれる人達が庄屋層に大勢いるわけで、さっきも言いましたように、みんな暇を持って余した隠居じゃないわけです。新田開発の第一線のリーダーだったわけです。考えてみると、良寛の芸術、書だとか詩だとか歌は、そういう第一線の連中との絡みの中で生まれた。あるいは忙しい連中だからこそ良寛さんの歌を好んだのではないかなという気がしないでもありません。ふっと思い出すのですが、新潟の駅前の北陸ビルに敦井美術館がありますね。北陸ガスの創業者である敦井栄吉が集めたいい陶磁器が展示してあります。長岡の今朝白の駒形十吉記念美術館にもいい品物が飾ってあります。いつ行っても、観覧者が私一人しかいないので、実に静かに鑑賞する事ができるというありがたい美術館ですが、あれは昔の大光相互銀行の創立者である駒形十吉の収集品を中心にしている。それじゃ敦井栄吉や駒形十吉はひまだったから集めたのか。違うようですね。みんなそれぞれの事業の創業者であり、大変に忙しかった。活気に満ちた人間だったわけです。だからこそ、美術品を集めた。しかも金持ちになって金にあかせて集めたというのじゃないのだそうです。若いときから、美術学校の学生かなにか、将来性のありそうな青年に目をつけて小遣いをやったりして、少しずつ集めていった。後になるとそれがみな偉くなったものですから、すごいことになったのだという話を聞いた事があります。彼らはひまだから美術を愛したのじゃない。おそらく、忙しくて、しかも彼らには評判の悪い面もありますから、キッタハッタをやっていたと思います。キッタハッタの人生だからこそ、逆に陶磁器や絵画やそういうものに心を惹かれて、それなりの審美眼をいつの間にか養っていた。ちょうど解良家や阿部家や原田家には、そういうところがあるのじゃないか。おそらく、忙しくて駆け回り、村上藩の役人に、何をやっているのだと叱られることもあったでしょう。口答えはできません。まして、交渉相手の白河藩の役人からどなられば、もっと小さい村上藩の役人にこぼすことさえできないわけです。相手は松平定信の藩ですから。必死に歯を食いしばらないとならない場面はたくさんあったと思うのです。だから逆に、良寛さまの書なんか、彼らがどこまでわかったか、わかりませんが、あの飄々とした書を、ことによると我々が見るのと違った目で、身にしみて見ていたのではないか。だから大事に残したのではないか。そういう気がするのです。そして、彼ら庄屋がリーダーになったといっても、実際にやったのは村々の百姓です。西蒲原は、あるいは白根島は中蒲原になるわけですが、この辺は江戸時代に非常に人口が増えています。あれだけ荒漠とした水害の地帯ですから、江戸時代が始まった頃、村も少なかったし人口もまばらなのです。そこへ、あちこちから人がやって来て、開拓していった。そのとき、周辺の村からも来たでしょうけれども、また、まとまって北信濃や北陸から来ました。だから、この辺でも先祖が北陸から来たとか、信濃から来たという家が沢山ありますね。味方の笹川邸の笹川さん。あれは信州の笹川村から来たから笹川と言っているわけでしょう。そのほか、平出・長沼・笠原など北信濃の村の名をとった苗字の家がこの辺りには多いです。そういう具合に、北信濃や北陸から大勢来ている。浄土真宗の寺と一緒に移って来たというケースが多かったのです。ですから、この辺では、信州から来た寺、北陸から来た寺がたくさんあって、聞いてみると、信濃以来の檀家だとか、能登からついてきた檀家だとかっていう家が必ずあります。方々から来て開拓していったわけですが、その苦しい環境の中で必死になって仕事をやりますと、逆に信仰が固まってきまして、浄土真宗の盛んな地域になったわけです。新潟県の旧郡ごとで調べますと、西蒲原が越後の中で中頸城を抜いて、寺全体の中で占める浄土真宗の寺院の率が 75 パーセントくらいで一番多いので

すね。それで、浄土真宗の教義の影響だといわれているわけですが、間引きをしないのです。江戸時代の人口は享保時代から慶応年間までほぼ 3 千万で終始します。経済はどんどん発展しているのに、なぜ人口が増えないか。おろしと間引きをやっていたのです。おろしというのは今と同じ、妊娠中絶です。間引きというのは、生まれた直後に吉野紙をぬらして鼻にあてて窒息死させるとか、そういうかたちで間引くわけです。そのとき女の子を中心にして間引くのだそうです。男の子は家を継がせないとだめだから、割によく残して、女の子を間引いたといわれております。しかし浄土真宗の強い北陸地方では間引きがすくなく特に西蒲原は間引かない。また、広島県、安芸も浄土真宗の強いところで安芸門徒と言われている間引きがすくない。安芸門徒と北陸門徒の最先端であった西蒲原あたりが、間引きしない土地なのです。したがって、よそにくらべて女の子が多いのです。洪水に襲われてしょうがない時は、結局身売りしなければならないという悲惨な現実もありましたが、とにかく女の子が多かったのです。統計的に調べてみてそうなのです。だから、良寛さまに「この里に 手まりつきつつ子供らと あそぶ春日は 暮れずともよし」という有名な歌があります。良寛は玉島の円通寺を出発しましてあちこち行脚していますから、間引きの多いことは知っていたと思います。ところが戻ってきた越後は間引きがほとんどない。そういう点では非常にうれしかったはずですが、しかし、水害に襲われて、いろいろ努力して水害を防いだといっても、横田が切れた、あそこが切れたとなれば、それが 2 年、3 年続けば貧乏でどうしようもない。娘を売らなければならない、という状態にもなります。良寛さまのこの歌の背後には、今の一とき、楽しくまりをついているこの女の子が、やがて江戸の吉原へ売られていくのか、あるいは上州の宿場町に売られていくのか、暗然とせざるを得ない面があったと思います。さっき、良寛には水害を嘆く歌と、悠々と水を楽しむ詩と両方あったのだと言いましたが、手まりの歌もやはり、

「この里に 手まりつきつつ子供らと あそぶ春日は 暮れずともよし」というのどかな風景と、しかし考えてみればその裏の風景と、複雑なものを持っている。複雑なものがあるからこそ、逆に字句の一通りの解釈とは違う深みが、読んでいるとなんとなく伝わってくる。それが、この土地の人々に良寛が親しまれた原因なんじゃないか、そんなふうに見ているわけですが。

<豊口>

先生からそんなふうにご言いただくと、私の素人なりの考え方がそう間違っただけではなかったという自信を持つ事ができました。さっきも申し上げたのですけれども、この手まりを子供たちとついでいる姿の裏に、何か隠されているのではないかと。遊女とおはじきをしたと申し上げましたけれど、やはりそういう世界のうらにも何かが存在したのだらうと解釈はしていたのですけれど。今の先生のお話を伺いますと、確かに地域の家族構成と、もう一つは人々とのコミュニケーションの中で新しい町を作っていくための、いろんな複雑な構造が残されてきたような気がします。特に寺泊や出雲崎、さらには柏崎という海岸線には大きな町がありまして、当時は、北海道の昆布から始まりまして、活



発にいろんなものがそれぞれの港に入ってきて、さらに西へ移動して行く。佐渡の金や銀や、石油までがこの地域から出て、それが江戸や大阪に運ばれて行くという、交易の地域であった。そういう点から見ますと、拠点にはかならず昔から遊郭というものが発達した。そういう世界で働くような人もたくさんいたのだらうと思うのです。今はそういう人たちを非常に批判的な目で見えていますけれども、おそらくその当時というのは、それほど悲惨な世界ではなかった。ひとつの社会のシステムとして、そういうものが存在したのだらうとしか、私は考えられないのです。そういう世界にまで、良寛さんが気配りをしていたというところに、良寛さんなりの人柄というものがしのべるのではないかなという気がいたします。良寛さんが大変な知恵者であったなと思うのは、読めない字で自分のネットワークを作って、そういう社会システムを作ったという、策謀ですね。これは、もう大変な人だったろうと思います。最初に利休の話をしましたけれども、彼もなかなか策謀家で、侍、武士をだまして、刀で人を殺して歩いている人間は、茶道なんてなかなか理解できないと思うのですよ。刀をはずして、茶室へ入って、お点前をいただいて、利休の話を聞いて、「うーん結構なお手前で」なんて言ってみたって、なかなかわからないけれど、それがわからないと一流の武士ではないと言われていたわけですから。茶道よりももっと勝る書道の世界で、良寛さんは社会秩序を作ってきたのだなという気を強く感じております。そういう意味でも、今日の先生のお話は面白かったのです。さらに土地の役人との関係などは何かございますか。

<井上>

村上藩の役人の中にも三宅相馬のように良寛を尊敬しているものもいましたし、そういう面でも地元の村役人たち、庄屋や組頭にしてみれば、良寛はありがたかった。つまり、交渉ごとのとき、ぎりぎりの交渉をしていて、ちょうど、市長さんや市議員の人達が中央官庁に行って、むこうの課長や部長とやり合う、頭を下げながらぎりぎりのつばぜり合いをすると同じことが、江戸時代にもしょっちゅうあったわけです。村役人たちがそういう時、「この前良寛さまに会いましたら、よろしゅう言っておられました」っていうようなことを言ったら、座が和むわけです。話をしやすいわけです。越後の銘酒を一本ぶら下げていくより、効果がある。そういう点にも、良寛は村役人にとってはありがたい存在だったと思いますし、子供たちとも親しんでくれる。砂地に水がしみるように、良寛さまの人徳といたしますか、人気というところがちょっと軽薄ですね、人徳は西蒲原にはしみこんでいったと思います。早い話、私は巻の出ですが、どこで習ったということはわからない、しかし、良寛さまの名前はずっと子供の頃から知っている。この辺の人はみんなそうじゃないでしょうか。良寛さまは今非常に有名です。良寛の研究者はとにかく有名人とつながりを強調する。会津八一が正岡子規を訪ねて良寛を語ったので良寛が中央に知られたとか、夏目漱石が良寛を、というふうに言いがちです。豊口先生がお持ちの相馬御風なんか盛んに良寛を紹介した。それで良寛が広まったということもあると思うのですけれども、それ以上に、私はやっぱり口伝えで地元の民衆の間にずっと語られてきたのがもとだと思うのですね。そう気がついたのは、明治10年から昭和20年まで、新潟新聞、昭和17年になって他と合併して新潟日報になるわけですが、のべ300日近くかかりましたか、他の目的もあったのですが、あの新聞を県の文書館へ行って通し読みしたのです。良寛がちょっとでも出てくると、コピーしておく。それで、まとめてみますと、良寛関係の記事は、この70年ほどの間に230回ちょっと出てくる。これは今からみれば少ないですね。今だったら良寛は、新潟日報に毎日のように出てくる。何十年もかかって230くらいの記事は少ないけれど、昔の新聞は小さくて4ページくらいでしょう。政治や社会のネタばかりの中で良寛がそんなにたくさん出てくる。これは他と比べると、たとえば鈴木牧之はこの間に18回しか出てこないのです。上杉謙信や河井継之助なんかより良寛のほうがよく

出てくるのです。そして、それは別に、有名人がどうしたこうしたいうのではなく、出雲崎で地域の有志が集まって良寛の法会をやったとか、五合庵に昔、良寛さまが住んでいたそうだとか。そういう記事がたくさんあるわけです。どこそで良寛の書画会が開かれたとか、そんな記事が非常に多いですね。みんながそれぞれに親しんでいる、という感じなのです。燕に来ましたので、燕の記事を一点紹介しますと、昭和12年5月8日の新潟新聞に、2段抜きで、「良寛さまを聴く、原田太田校長から」という見出しがあって、中身は、燕町太田小学校これは今の西小学校ですか、ここから2キロか3キロですね。原田校長が、良寛についての話をした。2時間半話をした。そうしたら、聴衆が堂にあふれ、感銘していた、というふうに書いてある。聴衆、堂にあふれというのだから、生徒だけじゃなくて父母が大勢集まったのだと思います。5月5日に端午の節句か何かの記念にやったのでしょうか。そういうことは、しょっちゅうあったのだと思います。実はこの太田小学校の校長というのは、良寛研究家原田勘平なんです。私が非常に愛用しています岩波文庫の『良寛詩集』これは原田勘平と巻出身の大島花束の二人が編集して、昭和8年に出しているわけです。これの編者である原田勘平が小学校の校長で、そういう話をしているのですね。考えてみますと、良寛全集を最初に大正時代に編集しました玉木礼吉、国上の出身ですが、これも西蒲原や三島郡の小学校の先生でした。大島花束も後に大阪へ行って、女学校や中学校の先生をやりますけれども、新潟県内では三島郡あたりで小学校の先生をやっている。小学校の先生で良寛関係の立派な本を出す、研究するという人がいくらかもいたわけです。玉木礼吉なんて、今長岡市になりましたが、深沢あたりの学校へ勤めたり。私、その辺の定時制に務めていたものですから、まわると、昔玉木礼吉先生が、なんていう話をちらっと聞くこともありました。小学校の先生に立派な研究者がいくらかもいて、良寛さまを噛んで含めるように語っていたのです。今の小学校の校長さんは、なかなか、プールをどうしないとだめだとか防火扉がなんだとかで、とても本を読むひまもないようで、事件が起きる度にテレビの前で深々と頭を下げて、「あってはならないことがありました。命の重さについてよく言って聞かせます」とほとんど官僚答弁です。あれではたして、生徒や父母が感銘を受けるのでしょうか。昭和12年に原田校長が2時間半話をして、村の人達がみんな集まってきて聴いた。おそらくその頃の太田校区で、バットで親を殺すなんていう生徒はいなかったと思います。そういうかたちで良寛伝説はずっと続いてきた。それで有名人も注目して、ちょこちょこ来て資料を集めたり、というのが良寛研究の近代になっての流れであろうと思います。そういう点で、この会も、なんで私が招かれたのかよくわかりませんが、燕で行われている、そしてなぜか、巻出身の私が、あいつだと西蒲原の悪口は絶対言わないということなのかもしれないけれども、招かれて、豊口先生の辛らつなお言葉をかみながら、話をしているというのも、考えてみれば、良寛研究史の大きな流れに乗っているのかな、という気がします。ここには原田校長にその頃習って覚えている人もおられるかもしれませんがね。もとの西蒲原の地に生まれた私どもも西蒲選挙などできるだけ敬遠して、原田校長が校区の人たちに良寛さまの話をしたというふうな、そういう芽を是非これを機会に、伸ばしていただければいいなという気がします。わたしがまとめみたいな事を言ってしまって、申し訳ありません。

<豊口>

小学校の校長先生が、小学生を含めた人々に話をされた。時代のすばらしさだと思います。校長が生徒たちと結びついている、父兄と結びついているというところに実は重要な鍵があると思うのです。今の小学校では、おそらく校長先生は、生徒や父兄とあまりつながっていないんじゃないかというふうな気がするのです。しかも土地、その周辺の地域ともつながっていないだろうという気がします。相馬御風さんは、新潟県の出身ですけれども、「一茶」、「良寛」、「芭蕉」3人を比較しながら書いてい

るのです。その中に一貫して彼が言っているのは、お互いに詩だとかそういうものを通して心の交流があったということ。しかも3人とも人々を愛していたということ。それから、自分のふるさとないしは生活の周辺に対して愛情を持っていたということ。そういうことが書いてありました。人を信じ、人を愛し、地域を愛し、自分自身の人生を人に迷惑をかけないで歩いていくという人々の生活を比較して書いておられるのです。なかなかすばらしい分析だと思いました。こういうすばらしい生活をした人の実態を語れる人が、今少なくなってきた。今日ある一つの確証を得たのですが、信濃川がこれほどすばらしい川に変わったというのも、この地域に住んでいた人達の心であり力であり、夢であった。それをずっとまとめてきた人が良寛さんの精神であり、その周辺であり、その地域の人々であったということが明らかになってきたと思います。将来、どういう形でこの歴史が作られてきたかということ、もう少しデータをベースにして分析していくと、明解な人と信濃川の歴史が浮かび上がってくるのではないかなという気がしております。

せっかくでございませうから、なにかご質問がありましたらお受けしたいと思いますけれど。

<会場>

ひとつ教えてもらいたいのですが。良寛さんの書というのは、現代人である我々は、たしかにそういう教育を受けていないから読めないと、思っていたのですが、当時の人は、一般レベルの人は読めないのかも知れないけれども、それより上の人は読めたのではないかなと素朴に思ったのですが、その辺どうなのでしょう。

<井上>

私はかなり読めたと思います。というのは、もう分水町でなく燕市ですが、渡部の阿部家に、良寛が「小山田の門田の田居に鳴くかわず 声なつかしきこの夕べかも」という歌、「間庭百花ひらき 余香この堂に入る 相對して共に語るなく 春夜よるまさになかばならんとす」という詩を書き、これに唱和して阿部定珍が同じ紙に「春雨の降りし夕べは小山田の かわず鳴くなり声めづらしも」という歌、「君と共にあい語る 春夜たちまちになかばを過ぐ 詩酒はかるにところなく 蛙声草堂に近し」という詩を記したものが残っています。それを見ますと、阿部定珍の字や歌や詩は、遜色があるといえはありますけれども、同じ紙に書いて、名人の脇に小学生が書いたというようなそんな違和感はないのです。ですから、あれはあれでちゃんと釣り合う。春の終りの夜、良寛と定珍が阿部家の座敷で酒を飲みながらゆっくり語り、歌や詩を書く。つまり当時の庄屋レベルは良寛とそれくらいの対応のできる知識と教養は持っていたと思います。そういう点で、私は良寛の書は全く読めませんし、漢詩も字引を引いてやっと読む。私は大学を出ていて、その程度ですから、大学も出ない当時の人間が良寛を理解できるはずがないなどと考えると大間違いで。近世では、自分が好きで字を書き詩を書き歌を詠む人なんていくらでもいたわけ。そういう点では、今のわれわれが想像するより良寛の書もわかっていたのじゃないか。もちろん、良寛の書の中には誰が見てもわからないというのもあるようですので、わからないところをありがたがることもあったかもしれませんが、しかし、変な言い方ですが、今の大学を出た私よりもはるかにわかる人間がざらにいた。特に庄屋クラスには。私は近世文化をそういうふうに見ております。だいたい江戸時代、日本はあまり文化が進んでいなかったというのは、明治政府の作ったウソです。明治政府としては、倒した江戸幕府が立派であっては困るのです。近世は暗黒時代でなければならなかった。だから、江戸時代について、みんな無学だったと強調したのですが、実際に江戸時代を調べてみますと、男だったら、半数くらいは普通の百姓でも字を読めたと思いますし。庄屋クラスになればもっと高いレベルです。だいたい御家流の字を書かなければ、庄屋の役目は務まらなかったわけ。あの御家流で書いた字を大学のゼミに持って出ますと、

学生が崩し字辞典で苦心惨憺してやっと読んでいる。おい、寺子屋しか出ていない連中の書いた字だぜ、と言うと頭をかいていますけれども。冥王星が惑星かどうかなどは我々のほうが知識は上です。しかし、字を書くとか詩や歌をつくるという点では、彼らの方がはるかに上だったと思います。

<豊口>

先生、一般の人が使っていた文字というのは、言葉でいうと標準語だったと思うのです。それは、みんなが読めるわけです。だけど良寛さんが書いた文字というのは、暗号だったのじゃないかと思うのです。阿部家と通じるためにはこの書体で書く。とにかく書体がこんなにたくさんあるというのは改めて認識したのですけれども、これ本当に良寛さん？と言いたくなるような書体がいっぱいあるわけです。だからそこにこめられている良寛さんのメッセージというのは、一種の暗号で阿部家には、この書体でいこうと。もう一軒の庄屋さんは、この書体でいこうと。と、書いているうちにいろんな書体ができてきて、それが良寛さんの書の世界を作り上げたのではないかなという気がしているのです。良寛さんはすごい人だなと、思うのです。

もうお一方。

<会場>

良寛さんの書・歌・漢詩などいろいろありますが、忘れてならないのは、良寛さんが禅僧であったということです。大変な禅の修行をされた。それから、勉強家であったという事はいろいろ書物を読んでみますとわかるのですが。そういう味わい深い漢詩とか和歌とかいうのは、人間としての苦悩とか悩みというものを深く、繊細な方ですから、持っておいでだと私は思っています。ですから多くの人に親しまれる人柄であり、残された作品・著書も 21 世紀に入った今でも、啓蒙、教えてくれるものが多いのではないかと私は思っているけれども。その点について、先生いかがお考えでしょうか。

<井上>

確かにそういうことだと思います。私は良寛という人は、固定的に考えてはいけないと思います。最初に、自由ということが出ましたけれど、自由を楽しみ、自由に生きたのじゃないかと。というのは、禅僧として非常に厳しい修行に耐え、たぶん最後まで禅僧であったと思いますね。島崎の木村家でも、線香をともしながら座禅をしたような詩がありますので、最後まで禅僧だったと思います。ところが同時に、自分は保社を脱して自由気ままに花や鳥を楽しんでいる人間なのだ、という詩もあるわけですね。保社とは組織のこと。この場合、曹洞教団という意味でしょう。良寛は生涯にわたり道元にあこがれていた、心酔したと思います。最後まで、中心の筋は道元だったと思います。しかし、全てを捨てて風雅の道に生きた西行にも心引かれる。もともと仏道に生きるのと、風雅に生きるのと二つの流れが日本の思想史の上にあったのです。たとえば僧侶で言うと、道元は曹洞禅に生きます、貫くわけです。親鸞は、書いたものを見ますと、詩の心はあったと思いますが一般の詩や歌は作らないで、ひたすら他力本願の教えを貫きます。良寛は、道元にあこがれ、その一方で親鸞の他力本願に引かれることもあった。と同時に全てを捨てて風雅の道にのめりこんでいく西行のあともまた慕わしい。たぶん良寛はそれらみんなを好きだったと思います。もし一つの寺の住職だったら、何かにとらわれなければならない。彼はとらわれることはなかった。自由な身ですから、どれにも親しんでいた。中心に曹洞禅があったということは間違いないと思いますが、良寛の詩に禅僧の名前がいっぱい出てきます。達磨大師を初めとして、中国の禅僧がたくさん出てきます。日本だと、道元はもちろん出てきますし、国仙だとか仙桂（センケイ）和尚だとか、みんな出てきます。それらの禅僧をずっとカードにとりながら考えて、はっと思ったのです。道元の次から国仙の前までの日本の禅僧が一人も出てこないのです。道元のあと曹洞教団は、教団として大きくなっていきます。たぶん良寛は、道元の純

粋さをちょっと俗化させて強大となったその組織に馴染めなかったのではないか、という気がします。しかし曹洞禅には馴染み続けた。それが良寛だったのじゃないかと思います。お答えになっているかわかりませんが。

<豊口>

話はつきませんが、時間が来てしまいました。ご質問はたくさんあると思いますが、今日はこれで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

<司会>

井上先生、豊口先生、ありがとうございました。皆様、お二人に盛大な拍手を今一度お願いいたします。

以上をもちまして、「われら信濃川を愛する」信濃川自由大学第11回講座を終了いたします。本日は長時間にわたりご参加いただきまして、誠にありがとうございました。お帰りの際には、お忘れ物のないようお気をつけください。また、会場を出られる際は、混雑いたしますので、皆様足元にお気をつけください。

皆様にお配りしたアンケートは、ぜひご記入いただき、受付のアンケート回収箱にお入れください。ご協力をお願いいたします。

本日は、ご来場いただきまして、誠にありがとうございました。